

東日本大震災への取り組み

DMATの救援活動

東京医科歯科大学では、2011年3月11日に発生した東日本大震災の支援活動として、被災地へ医師、歯科医師、看護師、事務員を派遣しています。医学部附属病院からは、DMAT(災害派遣医療チーム)を3隊派遣しました。ここでは、第1隊の活動記録(2011年3月11日～14日、仙台医療センター、仙台中央病院、東北厚生年金病院派遣)を紹介します。

Report01

14:46

震災当日(2011年3月11日)

宮城県三陸沖で震度7の地震発生。東京都内では震度5強。

15:13

厚生労働省医政局 DMAT事務局より、全国のDMAT隊員に対し待機依頼。

16:04

DMAT事務局より日本DMAT参集場所の連絡が入る。仙台医療センターが参集拠点に決定。

16:08

DMAT事務局より日本DMAT参集場所の連絡が入る。福島県立医科大学が参集場所に決定。

17:48

DMAT事務局より日本DMAT参集場所の連絡が入る。筑波メディカルセンター、岩手医科大学附属病院が参集場所に決定。

19:02

文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室より連絡が入る。



地震の影響で割れた学内の窓ガラス。

「国公立大学病院 病院長、事務部長、総務課長各位
本日、東北地方で大規模な地震が発生致しました。
すでに厚生労働省より都道府県を通じて、DMATの派遣依頼連絡が出されていることと思いますが、文部科学省へも大学病院に対する派遣要請が参りましたので、ご連絡致します。
ただし、まだ十分な情報がなく被害規模等も定かでない状況でありますことをご了解下さい。
参集場所は以下の通りです。
○仙台医療センター
○岩手医科大学
○福島県立医科大学病院
○茨城県筑波メディカルセンター
○印の施設は第一段で参集依頼を出されているため、○印の施設に優先的に参集頂きたいと要請を受けております。
ご不明な点がありましたら、ご連絡下さい。またチームを派遣されます場合も、念のため当課へご連絡頂きますようお願い致します」



都内でも死傷者が出たため、対応に追われるERセンターのスタッフ。

19:30

医科歯科 DMATチーム出発。

リーダー：大友康裕
メンバー：庄古知久(医師)、白石 淳(医師)、植木 稔(医師)、西 奈緒(看護師)、工藤 晃(調整員)、柴田智志(調整員)
移動手段：自動車(レクサスドクターカー、大学公用車アルファード)計2台
運転手：ドクターカー柴田、アルファード工藤

19:30-

20:55

東京都内大渋滞。交通機関がすべて停止しており、都心部に人があふれかえっている状況。赤色灯、サイレンを用いるも、大渋滞のため効果はほとんどない。アルファードは信号無視できないため、ドクターカーを追うも警察車両に「右折禁止！」と後ろから警告されるなど。

20:55

ドクターカー先導で、災害派遣であることを首都高速の上野入り口にて交渉し、首都高速の走行が可能となる。

21:35

東北自動車道川口JCT(ジャンクション)通過。

Report02

0:00

震災2日目(2011年3月12日)

東北自動車道 安達太良SA(サービスエリア)にて休憩。

0:41

東北自動車道 福島県内にて雪道となる。アルファードはノーマルタイヤ、かつ地震により路面に段差が多くできており、徐行運転(時速40～60kmでの走行)。

2:53

東北自動車道 国見SAにて休憩。ガソリン補給(停電のため手でポンプを回して補給)。

4:00

ビジネスホテル ルートイン仙台長町着。宿泊交渉OK。チェックイン時にホテルの人にパンをいただく(小さいパンを1人3個)。ライフラインがないためホテル内は真っ暗。仮眠。



都内の道路は大渋滞であったが、首都高速道路では他の車両に1台も出合わなかった。



停電のサービスエリア。手で給油した。



診療中のDMAT。



重症エリアの診療風景。



東北厚生年金病院看護ステーションの被害状況。



津波被害の様子。



救援活動を終え帰京した派遣メンバー。

6:40

ビジネスホテル ルートイン仙台長町出発。

7:00

合同ミーティング。

8:00

赤タグ治療(最優先治療)担当DMATとのミーティング。1時間行動を共にし引き継ぎ。

9:00-

初療室において、赤タグ治療担当。
赤タグ統括：庄古医師

12:00-

赤タグ担当からSCU(臨時医療施設)担当へ担当交代。SCUへの搬送対象患者のバックアップ準備であるが、対象者がなくまたSCU側での広域搬送状況の把握できず。SCUと医療センター間の通信手段も厳しい。

12:13

厚生労働省医政局 DMAT事務局より連絡。
「福島県の広域搬送は実施したとしても小規模であり、既に参集済みの8隊で運営可能との連絡あり。まだ空港に着いていないDMATは仙台医療センターへ向かってください」

15:30

SCU(霞目自衛隊駐屯地内)より仙台医療センターに移動(大友、工藤)。

16:00-17:30

宿泊所、食事手配に仙台市内を走り回る。

16:10

宮城県庁にて打ち合わせ(大友)。

17:30-

ビジネスホテル ルートイン仙台長町に連泊交渉のため移動(植木、西、工藤、柴田)。2泊連泊で交渉OK。しかし、電気、ガス、水道が全く復旧の見込みがなく、夜間(18時以降)は真っ暗な中で一晩過ごすこととなる。各部屋のトイレも水が出ないため、階段で1Fまで下り、所定のトイレを利用してもらう(流す水はノックに入った大浴場の残り湯)。17時頃にホテルの人が「本日最後の炊き出しです…」といってコーヒークップに入った少量のおじや風雑炊を出してくれる。他の食材は食べ物、水に至るまで入手困難であり、持参した保存食(アルファ米)を調理し、真っ暗な部屋で食事を取る。

17:57

厚生労働省医政局 DMAT事務局より連絡。
「福島第一原発の爆発があり、放射能漏れの恐れがあるため、十分気を付けた活動をお願いします。周辺地域における危険区域の立ち入り、夜間の外出は極力控えるようお願いします」

Report03

2011.3.13
03

3:45

震災3日目(2011年3月13日)

ビジネスホテル ルートイン仙台長町出発。

4:50

心肺停止の患者搬送。CT機器が使えないため、仙台市立病院に患者を搬送するとともに、同乗医師を仙台医療センターに戻すため、ドクターカーを市立病院まで移動。救急車同乗：植木医師 ドクターカー：工藤

5:00

仙台市立病院着。

5:35

CT検査終了。仙台医療センターに戻すことに決定する。

10:15

仙台医療センター DMAT本部招集。医科歯科の他病院援助として東北厚生年金病院に派遣が決まる。

11:05

東北厚生年金病院着。被害状況視察。

13:00-14:30

津波の被災地視察。

・宮城野区 七北田川付近 ・宮城野区 キリンビール工場付近
・宮城野区 宮城産業交流センター ・宮城野区 三井アウトレットパーク付近

14:30-

霞目駐屯地と仙台駐屯地間を2往復し、霞目駐屯地で15リットルずつガソリン補給を受ける。

16:40

仙台医療センター着。

17:00

夕食。弁当支給(箸なし、水なし)。

19:00-20:30

医科歯科 DMAT帰京決定。

Report04

2011.3.14
04

0:55

震災4日目(2011年3月14日)

休憩。東北自動車道 蓮田SA。

2:30

大学着。

14:02

岩手県から全国に救護班の派遣要請。
「現在、DMAT活動のニーズは落ち着いてきましたが、救護班のニーズは非常に高いものと考えられます。DMATの隊員におかれましても救護班としての派遣が可能な方は、ぜひ派遣についてもご検討ください」

22:41

DMAT事務局より連絡。
「静岡県で大きな地震(震度6強)がありました。傷病者が多数発生する可能性があり、報道やEMIS等による災害関連情報に注視いただき、DMAT出動を要する事態に備え、準備・待機をお願いします(このメールは、命令するものではなく、自主的な待機をお願いするものです)」

第2隊(3/16～19、岩手県庁、大船渡病院)、3隊(3/20～22、福島県庁)の活動に関しては、HP http://www.tmd.ac.jp/accm/topic/60_4e085d506b0f7/をご覧ください。

2011.3.11
01

2011.3.12
02

各分野での被災地支援活動

東日本大震災の被災地域は多岐にわたる支援を必要としています。
東京医科歯科大学としても、医学、歯学、看護学と専門領域を生かしながら、支援活動に参画しています。

歯科医療支援活動

大学院医歯学総合研究科
健康推進歯学分野 教授
川口陽子



避難所を巡り被災者の応急処置を行う歯科医師。

東京医科歯科大学では厚生労働省、日本歯科医師会、学術団体などと連携して、被災地への歯科医師、歯科衛生士の派遣や、必要な物品、器材の提供による歯科医療支援活動を行っています。

地震発生直後には、警察庁からの要請に応じて災害犠牲者の身元確認

業務を行うため、歯科的個人識別を担当する13名の歯科医師の登録を行いました。被災地では、地震と津波の影響で病院や診療所が壊れたり流されたりして、地域の歯科保健医療提供体制に大きな被害が生じています。そこで、厚生労働省からの依頼を受け、本学から宮城県女川地区に2組の歯科チームを派遣しました。

歯科チームは各避難所を巡って、被災者の応急処置を行いました。また、口腔清掃用品を配布し、必要な場合には歯科保健指導・口腔ケアを行いました。デンタルチェアなどの歯科用機材がなく、水や電気も十分でない状況で、歯科治療を行うのはかなり困難でしたが、治療後には被災者も笑顔になってくれました。

避難所生活はプライバシーもなく、不安やストレスの多い環境です。配給されるおにぎりやパンなどの食事では栄養摂取量も少なく、栄養バランスも不

十分です。水や口腔清掃用品も不足しているため、歯や義歯の清掃が行えず、う蝕や歯周病などの歯科疾患が進行・悪化していきます。

今後、被災地では、子どものう蝕、成人の歯周病などの歯科疾患の進行・悪化が危惧されます。高齢者や要介護者では誤嚥性肺炎のリスクが高まるのが心配です。

歯や口腔の問題は食事摂取に影響し、身体の抵抗力、健康を維持するうえで大きな問題となるので、早期に歯科の問題を発見し、適切に対応していくことが求められています。

避難所から仮設住宅への移動は徐々に開始されていますが、今後、人々が通常の生活に戻るには時間がかかるでしょう。時間経過による人々の歯科保健医療ニーズも変化してくる考えられます。変化するニーズに適切な対応ができるよう、本学においても様々な支援を行っていく予定です。

action
03

心のケア支援活動

大学院医歯学総合研究科
精神行動医学科学分野
(医学部附属病院精神科) 教授
西川 徹

action
01

本学の精神科・精神行動医学科学分野では、東北大学医学部、福島県立医科大学の要請により、被災地での「こころのケア支援活動」に、計4名のスタッフを派遣しました。

4月28日から4月30日までは、東北大学こころのケアチームの支援活動に治徳大介助教とデイケアの金子慈史精神保健福祉士が参加し、石巻市の支援活動に協力しました。石巻市役所では、市職員に対する心理教育としてストレスケアの講義を行いました。遺体を扱う職員や各部署の幹部がとても疲弊している姿が印象的でした。「こころの健康相談」では住民からの相談対応を行いました。ある10歳男児は、

多くの遺体を目撃し、不眠、白昼夢が1カ月半以上続いていました。児童精神専門医が必要だったため、仙台市内の児童専門病院を紹介しました。時間経過とともに住民の方は落ち着いてきており、集団生活の適応障害の方も軽快傾向にあります。その一方で、市職員や避難所のリーダーレベルの方のストレスやアルコール問題、子供のPTSDが顕在化しつつあります。今後も継続的な支援が必要になるでしょう。

5月1日から5月3日までは、福島県立医科大学心のケアチームの支援活動に竹内崇助教と上里彰仁助教(睡眠制御学講座兼務)が参加しました。放射線量は、風向きの影響もあり相馬市は福島市よりも低い値でした。相馬市は、震災直後は原発のために避難してきた人々であふれ、避難所も混乱していたようです。現在は多くの人がほかの地域に分散され、一定の平穏がもたらされている印象を受け



心のケアチームのミーティング。本学のほか、慶應義塾大学チームなどと毎日開催。

ました。被災者の方々は、現在は避難所のコミュニティの中にいますが、仮設住宅に移り現実に直面化した時に心の問題が顕在化される可能性が示唆されました。また、これまで使命感でひたすら休まず活動してきた各施設の職員の精神的な問題も懸念されます。さらに、元来相馬市には精神科診療を行っている病院・診療所がなく近隣に頼っていたため、新たな精神科医療を構築する必要性が取り上げられており、継続的な支援が重要であると考えられます。

action
04

医療支援および 医療事情調査

大学院医歯学総合研究科
血流制御内科学分野
(医学部附属病院老年病内科) 教授
下門顕太郎

関東の国立大学による医療支援の一環として、東京医科歯科大学からも5月7日より6月中旬にかけて、3チームが南三陸町および気仙沼市に医療支援および医療事情の調査のため派遣された。

震災から2カ月を経過した時点でも、南三陸町はがれきの中に破壊された病院や警察の建物・打ち上げられた漁船が散在している状態であった。しかし医療状況は落ち着きつつあり、各地からの医療支援チームが避難所を巡回する災害医療体制から、公立志津川

病院の仮設診療所を拠点とした保険医療に移行しつつあった。

気仙沼は市の山側は津波の被害を免れて都市機能が保たれていた半面、人口が多い分被災者の数も多く、市街地から離れた遠隔の被災地も多く抱えているなど、南三陸町とは若干状況が異なっていた。しかしここでも医療状況は落ち着きを取り戻し、被災を免れた診療所や薬局を中心とした保険医療に移行しつつあった。本学のチームは避難所での慢性期疾患の治療や肺炎球菌ワクチンの接種にあたった。

痛感させられたことの一つは、タイミングよく効果的な支援を行うには(当然のことながら)ノウハウが必要だということである。

南三陸町で震災直後から2カ月後まで継続的かつ効率よく支援を行っ



戸倉自然の家の仮設住宅。

ていたのは国境なき医師団など国際的に医療支援を展開している団体だったと思われる。紛争地の難民を援助する団体のノウハウは実は自国の同胞を助けるのにも必須のものであった。

また南三陸の医療の復興の拠点となった仮設診療所はイスラエル軍が建設し医療器材ごと寄付していったものであった。日本人の手で医療設備の整った仮設診療所の1つや2つを建てるのはなんでもなかったはずだと釈然としない思いが残った。

Student Action

ボランティアとして 震災復興支援

医学部保健衛生学科3年
土井紗也香さん 安尾理実さん

医学部保健衛生学科の土井紗也香さん、安尾理実さんは、全国大学生生活協同組合連合会の震災復興ボランティアに応募し、被災地の支援活動に参加した。期間は、4月30日から5月5日。支援先は宮城県東松島市だ

った。ボランティアには、全国の大学から大学生70人が参加。土井さんらは、最初の4日間で、地震、津波などの被害にあった一般住宅の清掃、片付けなどを担当し、庭掃除、泥のかき出し、資材の運び出しなどを行った。

「ある家は膝くらいの高さまでヘドロがたまり、とても生活できる状況ではありませんでした。それらを麻袋に詰めて運び出しました」(土井さん)

5日目は、被災地の住宅を1軒1軒回り、「いまボランティアに求めることは何か」というテーマでニーズ調査を実



左から土井さん、安尾さん。

施した。「この経験を生かして、より一層、保健衛生学の学びを深め、看護師の道を目指したいと思います」(安尾さん)と2人は決意を新たにしている。

action
02